SIOME

東京藝術大学×香川大学連携事業

［シオメ］

ART&SCIENCE

02

AUTUMN 2026



特集

「まちづくりの研究場」ぐんだらけ

TAKE FREE

WORDS OF SIOME

SIOMEのことば



世界を見る目を、持ち寄る

私と引田との縁は、2017年に東京藝術大学がこの地で行ったアートプロジェクトに遡ります。前年に制作した移動式住居「幸庵一参号」を持ち込み、町を巡りました。中でも強く惹かれたのが引田の港です。町と海の距離感、長く伸びる防波堤、その先に広がる瀬戸内海。防波堤の先まで出て、海の側から振り返ると、町や山もまた違った姿に見えてきました。その魅力を伝えたくて、映像にも残しました。地域に関わると、私たちはつい「何が問題なのか」「どう解決するのか」と考えます。でも、アートは問題解決のための手段ではないと私は思っています。そこにさまざまな視点を加え、これまでとは違う見方を生み出す。まなざしが変われば、見慣れた風景の中にも、それまで気づかなかった魅力や価値が見えてきます。あれから約10年。今、香川大学と東京藝術大学はSIOMEという拠点をつくり、再び引田に関わっています。「ぐんだらけ」もその活動のひとつです。暮らす人、訪れる人、研究する人、表現する人。それぞれの「世界を見る目」を持ち寄ることで、まだ気づいていない何かが姿を現す。世界を見る目は、ひとつじゃない。陸から海を眺める。海から町や山を振り返る。ここで暮らす人が見ている風景と、初めて訪れた人が見つける風景。異なるまなざしが出会い、重なり、ときに揺らぎながら、新しい価値や問いが生まれていく。SIOMEが、そんな豊かな「潮目」でありたいと思います。



海の皺、社会の皺であるSIOMEを解きほぐす

SIOME（潮目）は海の中で起こる様々な事象が海面に浮かび上がり、潮の流れの不思議な会合により海面に現れるいわば「皺（しわ）」。この「皺」は瀬戸内海に暮らすヒトを含むすべての生物の営みの表も裏も凝縮しているように見える。SIOMEに凝縮する海ごみは不都合な真実だが、SIOMEは稚魚たちには安心な棲み処でもある。

アーティストはSIOMEに瀬戸内海で起こる様々な事象の縮図を見出し、ある種の愛しさを感じつつ物語を紡ぎ出し、作品を創出する。一方、海洋環境の観察を続ける科学者は、瀬戸内や地球の将来を想像し、ともすれば恐怖に押しつぶされそうになるが、伴走するアーティストの海を見つめるまなざしに勇気づけられ、人々に正しい事実を知らせるミッションを遂行し続ける。

さて、SIOMEは海にだけ存在するのではなく、私たち人間が暮らす社会にも存在するのではないだろうか。例えば、「ぐんだらけ」が活動する、消滅しそうな地方の町にも目に見えないSIOMEが存在しているのではないだろうか。両大学の研究者たちは、J-PEAKSの活動を通じて「解きほぐす」という言葉をしばしば口にするようになった。彼らは、引田の地に漂う目には見えないSIOMEを心とからだで懸命に感じ取ろうとしているようだ。地域社会に漂うSIOMEが解きほぐされ、血流がよみがえる未来を信じて科学者とアーティストの共創は続く。

橋本和幸

東京藝術大学美術学部長・大学院美術研究科長。空間デザイナー・アーティストとして商業施設等の空間デザインを手がけたのち、同大学にて、デザインとアートを横断する空間・家具・照明等の研究や展覧会、社会連携プロジェクトに取り組む。同大学における「SIOME」の事業実施統括責任者。

筧 善行

香川大学イノベーションデザイン研究所長。臨床医学者（専門は泌尿器科学）。2023年9月まで香川大学長、以後現職。J-PEAKS連携校の事業実施統括責任者として、アーティストと科学者の共創による瀬戸内の地域課題解決の現場指揮をとっている。

写真：（左）HASHIMOTO Tatsuya ／（右）KAWABATA Ayaka





すべてをひとの都合よくコントロールしようとする「陸でのルール」って、もう限界がきているんじゃないかな。陸では線がひけてしまうから、境界線が生まれてしまうけど、海では、線はひけなくて、まっすぐにさえ進めない、出る風や波の力を受け入れなきゃ船は進まない。「自然があってこその自分」という感覚が当たり前にある。「陸の視点」の頭を一度リセットして「海の視点」で眺めてみると、過疎地や離島は切り離された場所ではなく、海でつながっているそれぞれの時間が流れていて、それらは混ざり合って、きっといつか新しい可能性が生まれる豊かな「潮目」とも捉えられるのではないだろうか？僕らの心の持ちようを、「海の視点」でひらいてみよう。

東京藝術大学長　日比野克彦











SIOME
東京藝術大学×香川大学
ART & SCIENCE

CONTENTS

04
FEATURE 01 —— だらだらと続く日常の豊かさを考えるまちづくりの研究場「ぐんだらけ」

14
FEATURE 02 —— ジオアート GEOART 展「沈降と隆起 ― 大地を泳ぐために ―」

20
RESEARCH ——「窓」遠隔コミュニケーションシステムでひろがる地域の可能性

23
SIOME Topics



特集1

だらだらと続く日常の豊かさを考える まちづくりの研究場「ぐんだらけ」

「ぐんだらけ」は、地域に関わるさまざまな人たちが、それぞれの立場や専門性を持ち寄り、暮らしのなかで学び合いながら、地域社会の可能性を探る実践研究の「場」です。アートの〈問いを立てる力〉と、科学の〈観察し、探究する力〉を手がかりに、地域にある他者・土地・文化と関わり、関係を紡いでいくプロセスそのものを活動としています。





東かがわ市引田（ひけた）

瀬戸内海の入り口に位置する引田は、古くから風待ちの港として発展してきました。現在も、漁業や手袋をはじめとする地場産業、長年続く祭礼や行事、人を迎え入れ、もてなすお接待の文化が色濃く残っています。一方で、人口減少や少子高齢化、地域コミュニティの変化など、全国の地域社会に共通する課題も顕在化しています。こうした土地固有の文化と、地域社会に共通する課題の双方を併せ持つ引田を、私たちはこれからの地域社会のあり方を実践的に考えるためのフィールドとして位置づけています。

引田の中心地に江戸時代から残る町家を、活動拠点「ぐんだら家（ぐんだらけ）」として開いています。学生やアーティスト、研究者がやってくると、窓に明かりが灯ります。すると、住民が「おかえり」と迎え、ぐんだら（だらだらとおしゃべりすることを指す方言）が始まります。

何気ないおしゃべりの中で、引田で起きた出来事や噂話が立体的に浮かび上がり、まちの小さな変化が、そこに集う人たちへ共有されていきます。手作りのパンや新鮮な魚、郷土料理が自然と持ち寄られ、気づけば大人数でお昼ごはんを囲んでいることも日常茶飯事。

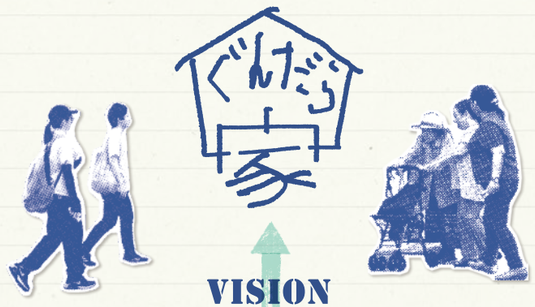
ぐんだら家では、機能を固定せず、日常に呼応して変化し続ける「場」であることを大切にしています。アーティストも研究者も学生も住民も、対等でありながら、それぞれ違ったやり方でまちに関わる。互いの違いを受け入れ、偶然を招き入れることで、ここから新しい活動が生まれ続けていくのです。

文：MITANI Nazuna（p4-7）、編集部（p8-12） 写真：KAWABATA Ayaka（p5-9, 12）

A WORK IN PROGRESS

ぐんだらけは、「変化し、育ち続ける場」

ぐんだらけに、あらかじめ決められた完成形はありません。
人が出会い、対話し、実践するなかで、場の役割は少しずつ変わってきました。
計画どおりに進んだこともあれば、偶然の出会いから始まった活動もあります。
大切にしているのは、何かを完成させることではなく、
変化し続けるプロセスそのものです。



VISION

持続可能な
地方分散型社会の実現

大学は、総合知をもって地域と共創するパートナーに。
地域は、新しい価値や問いが生まれ続け、
人生100年を豊かに暮らせる場所に。
誰もが、豊かで人間らしい暮らしの場として地域を選べる社会へ。

OUR MISSION

引田ならではの豊かな日常を
持続させる土壌づくり

一過性の盛り上がりをつくるのではなく、引田に受け継がれてきた
「土地と共にある暮らし」の価値を見つけ、育てるコミュニティをつくる。
そして、他者と共に地域の未来を問い、実践する人を増やす。

実践型人材育成

まちを変える一人のヒーローに頼るのではなく、地域で活躍する人材が育ち続ける仕組みをつくる。アートとサイエンスの双方向から、地域で実践と研究を往復できる人材を育てる。

対話と協働の場づくり

「ぐんだら家」を起点に、立場や目的の異なる人々が出会い、違ったまま対話できる場をひらく。地域に点在する活動や情報をつなぎ、互いの違いを生かして協働できる関係を育てる。



1. 大学とまちが出会う場に

拠点「ぐんだら家」ができ、普段は接点のない地域住民、アーティスト、学生、研究者が同じ場所に居合わせるようになった。

2025.02
「ぐんだら家」がオープン。

2025.03
引田ひなまつりに初参加。住民から集めたまち中の赤いものでひな壇をつくる作品「藪飾り（けかざり）」を制作。

2025.04–07
みんなで「ぐんだら家」をつくる。学生や教員、地域の人たちと、古民家を少しずつ整備。

2. 協力が生まれる場に

アーティストの作品制作に、いつの間にか住民が加わるのが当たり前に。立場や役割を越えて、一緒に手を動かす風景が生まれていった。

2025.08
瀬戸内国際芸術祭に参加。3人のアーティストが引田に入り、地域と関わりながら作品を制作。



3. まちの内と外の結び目に

瀬戸芸の来訪者と住民が出会い、アーティストや学生たちとの会話からイベントが生まれる。ぐんだら家を介して、まちの内と外がつながりはじめた。

2025.08
住民発案の「ぐんだらライブ」が誕生。地域の「おせったい」を通じて、まちの内と外をつなぐ作品《Parabell》や、その場に居合わせた人々の語りをひらくプロジェクト「せとぎわラジオ」を実施。



4. 「場」そのものを研究する場に

香川大学医学部看護学科の実習を実施。さらに、臨床心理学・社会学の専門家も加わり、ぐんだらけで起きていることをそれぞれの専門から捉え始める。



2025.05–12
臨床心理学や看護学を専門とする研究者・学生が加わり、ぐんだらけで起きていることを観察。

5. ときどき、まちを真面目に語る場に

それぞれが感じていることや、まちで起きていることを話すように。ときには、まちのことをちょっと真面目に語り、一緒に考える時間も生まれていった。

2026.01–03
引田ひなまつり2026アートプログラム「ヒナホドキ」を実施。学生が引田に滞在し、住民との対話やリサーチを重ねながら作品を制作・発表。





2026.07
18人の学生による1年間の地域実践がスタート。異なる専門や関心を持ち寄り、引田の人や暮らしに触れながら、それぞれの問いを探る。

6. まち全体が、学び合うキャンパスに

先生や学生、住民やアーティスト、地域の子どもも、ぐんだら家で遊ぶように。日々出会い、知識や見方を交換する風景が、まちのあちこちに生まれた。

7. これからぐんだらけは、まだ途中です。







INTERVIEW

見方ひとつで、まちは変わる。引田の実践から考えること。

宮崎晃吉　建築家／東京藝術大学 芸術未来研究場 特任准教授

群馬県前橋市生まれ。東京藝術大学大学院修了、磯崎新アトリエを経て2011年独立。東京・谷中で築古建物を改修した飲食・宿泊事業を設計・運営。共著に『最小文化複合施設』。

東京・谷中を拠点に、最小文化複合施設「HAGISO」などを展開する建築家・宮崎晃吉さん。東京藝術大学と香川大学が組むプロジェクト「ぐんだらけ」を率い、消滅可能性自治体に数えられる東かがわ市引田に入った。まず取り組んだのは、江戸末期の町家に拠点「ぐんだら家」を構えることだった。課題のまちを可能性のまちとして読み替えていく宮崎さんに話を聞いた。

「いつでも行けば会える」場から

――ぐんだらけがイベントを打つのではなく、まず「場」を持つことにこだわったのはなぜですか。

イベントだけをやっていく試みだと、実態や愛着のようなものが、住民にとっても、こちら側にとっても下ろしづらいんです。いつでも行けば会える、という状況がないと成り立たない。これは東京・谷中での僕自身の経験がすごく大きいですね。僕は木造アパートを改修し、飲食・展示スペース等を持つ最小文化複合施設として再生し、そこに建築事務所を設けました。いきなり街中のマンションの一室で設計事務所をやっていたら、仕事でしか社会との接点が持てず、何も起きなかったと思うんです。けれど、誰でも来られるカフェのような「場」をつくったことで、思いがけない出会いや機会が爆発的に増えた。1日100人、年間で4万人ほどが訪れる計算になります。自分たちが意図した、計画したものだけでプロジェクトがうまく進むかというと、それはごく一部でしかない。思いがけない偶然や、向こうから持ちかけられるようなことを呼び込む構えを、どのように用意しておくか。その意味で「場を持つ」ことは非常に重要です。



はじめての住民向け
プロジェクト説明会の様子。

引田では江戸時代末期の建築で、医院や書店として使われてきた松村家住宅（登録有形文化財）を拠点にしたいと提案しました。これが現在の「ぐんだら家」です。建物の大家である江本手袋との出会いが大きかった。地域に対する思いを聞いていくなかで、「一緒にやりたいな」という思いが出てきました。

――地域の課題には、どうアプローチを。

課題とその解決策を1対1に対応させることはしないでおこう、ということは最初から決めていました。地域が抱える課題は山ほどあるわけです。高齢化が進んで医療費が増えるけれど十分な医療体制がないとか、子どもがいなくなって小学校が統合され、家族層が住みにくくなって人口が減り、商業も成り立たなくなる。全部が連関しています。ひとつひとつの課題として捉えてしまうと、解決策にキリがない。

何が根源的な課題なのかということを、我々も正解を持っているわけではないけど、この場所と関わる人たちを通じて知っていこう、というプロセスです。そうすると自然と、僕らが求められることも見えてきますし、機会をどんどんいただけるようになって、地域の資源と結びついていく。

――ぐんだらけは藝大・香川大の学生たちが実践できる人材育成の場です。今後のぐんだらけの役割は?

これまでのぐんだらけでは、サイト・スペシフィック（場所の歴史や自然、空間の形に合わせて作られる芸術作品や表現）な作品をつくりに行くところに重きを置いていました。ですが、作品としてのアウトプットよりも、学生たちがこの場に当事者として関わっていくプロセス自体を、もっと地域にも還元したいと考えています。学生にとっても、アウトプットありきで地域を「ネタ」にするだけではない形にしたい。もっと本質的な問いに向き合えるような座組みにしたいというのが、今年度からの意図です。

そのために、年間を通じたプロジェクトにしたり、個人の取り組みではなく藝大と香川大をまたいだチームとして取り組む。単に個人の作品的な成果に回収されない構えで、みんなで自分たちも変わっていける機会にしたいと考えています。

現場に解き放たれたとき

――藝大生は「作品をつくる」ことに強い動機を持っているのでは。

ぐんだらけの活動に興味を持つ人たちは、いわゆる作家型として、自分の専門性だけを既存のアートマーケット等で表現したいというだけではないんです。作家としての側面を持ちつつも、人間としてどうあるか、それが地域にとってどういう存在になり得るのかを知りたいと思っている。大学院のフェーズになると、専門的な研鑽を積んだ上で「それがどう社会に落とし込めるのか」を考えている学生が多い。

結局、大学が校舎内で提供できるものは、ある種の「シミュレーション」なんですよね。建築で言えば、お施主さんの役割を先生がやっているような「箱庭づくり」的な側面がある。でも本当の現場に解き放たれたときには、既存のアカデミズムで評価される軸とは違う基準が必要になります。



プログラムに参加する学生と、
かめびし醤油との打ち合わせ。

課題と見るか、可能性と見るか

――現場では何が基準になるのですか?

僕たち講師陣が評価するものではないですし、人気投票のようなものでもない。まずは自分自身が居場所や実感を持ち、自分のやっていることを確かめられるということが、一番の指標だと思います。もうひとつは、一般的には価値がないと思われているものに価値を見出す視点を、地域に提供できること。特に地元の人が当たり前すぎて見過ごしているものに対して、アートの視点は「不要だと思われていたものをお宝に変える」ような錬金術的なところがありますからね。

空き家なんていうのは、まさにその最たるものです。どう使うか次第で地域の資産になる。それを「課題」と見るのか「可能性」と見るのかは、自分たち次第です。

――ぐんだら家の近くにある、宮崎さんたちが再生に関わった「東かがわ手袋ギャラリー」の会場デザインにも表れていました。

新しいものを持ち込むのではなく、そこにあった布の束を引き伸ばして綺麗にして日よけにしたり、余っていた家具を組み直してカウンターをつくったりしました。捨てれば産業廃棄物として処分費用がかかるようなものを編集し直して、場をつくるという実践です。



瀬戸内国際芸術祭　レオニート・チシコフ「みんなの手　月まで届く手袋を編もう!」
マリーナ・モスクヴィナ「てぶくろくんのおはなし」

――地域の側を巻き込むことは。

本来、地域の人も巻き込んでいくべきだと思っています。地元の歴史ある企業さん、今年度のプロジェクトで協働しているかめびし醤油なども含めて、彼らからのオーダーのようでありながら、彼ら自身も巻き込んで自ら変わろうとするきっかけになるような、強力な協働の形をつくっていきたいですね。行政に頼りすぎず、民間の大家さんや地主さんと深い信頼関係を築いて、「一丁やらせてみるか」と思ってもらえる寛容さや危機感を共有することが大切です。

市場価値だけに囚われない場所で、地域に愛着や誇りを持つ人たちが少しずつ増えていくこと。一過性のイベントで終わらせず、じわじわとバトンが渡されていくような関係性をつくっていくことが、これからの地域にとって一番必要なことなのだと思います。

――最後に。こうした活動を、どういう時代認識で捉えていますか。

今の時代に生きる意味とは何か、と考えることが多くあります。戦後の焼け野原から復興する時代とは違い、今は物質的・環境的には満たされているなかで、それぞれが生きる意味を見出さなければいけない。

でも面白いのは、自分たちの考え方次第でどうにでもなる時代でもあるということです。資本や量だけがものを言う時代ではなく、小さな個人であっても、物事の見方やビジョン次第でいくらでも価値を変えられる。「うちのまちには何もない」と思われている場所こそ、誰かのビジョンによって価値がガラリと変わる、レバレッジが効く余白があるんです。僕は引田でさらにそう感じています。

MEET. GATHER.
MEET AGAIN.

会って、
場所が生まれて、
また出会う。

今、つくるべき「場」って何でしょう。

「場づくり」という言葉を、耳にする機会が増えました。
けれど、「場」はつくるものなのでしょうか。
それとも、生まれるものなのでしょうか。
「ぐんだらけ」では、計画した活動も、偶然の出会いから
始まった活動も、大切にされてきました。
人と出会い、話し、また出会う。
その繰り返しのなかで、いつのまにか場所ができていく。
ここでは、藝大と香川大の学生や研究者・関係者、
引田の人たちに、「今、つくるべき場」を問いかけました。

違ったままで、いられる場。



竹森元彦

香川大学医学部臨床心理学科教授。臨床心理学・カウンセリングを専門に、「ウチとソト」の視点から、個人への心理支援と地域・コミュニティにおける人と人との関係や場づくりについて、実践と研究に取り組む。

カウンセリングは、安全に自分を語り、誰かに聴いてもらえる場の一つです。ただ、そこで生まれた経験や知は二人の関係の中にとどまります。今つくるべきは、その関係性を多くの人へと開いた「境界としての場」です。違った人が否定や評価を受けずに自分を語り、互いの声を聴く。異なる人に自分を語るからこそ、自分が何を感じ、何を大切にしているのかも見えてきます。何度も訪れ「また会える」ことで、場とその人の内につながりが生まれ、「いまのままでよい」という感覚が育ちます。場を見守る人もまた、集まる人から学び、互いに育ち合います。その土地の歴史や風土を受け継ぎながら、対話の中に未来がぼんやりと見えてくる。開かれた場を保つことは容易ではありませんが、「違ったままでいられる」ことは、自分だけでは思いつかない新しい考えや物語を生み、その生きた物語が、困難を乗り越えていく内なる力になるのだと思います。

「ちょっとやるよ」が生まれる下町酒場。



佐藤光

香川大学イノベーションデザイン研究所 特命助教／リサーチ・アドミニストレーター。民間企業で10年間、全国各地でまちづくりに携わる。現場での実践をもとに、アカデミアの視点からまちづくりを捉え直している。

店主ひとりでは、どうにも店が回らない。するとお客さんが「これ運ぶよ」「それ、やっとくよ」と半分店員になる。常連が初めて来た人に声をかけ、気づけば皆に「係」があって店を支えている。私が思い描くのは、そんな下町酒場のような場だ。便利なサービスは、私たちの暮らしを支える大切な仕組み。でも、便利になりすぎて、それだけでは満たしにくいものもある。「あなたがいてくれて助かった」と言われること。自分も誰かの役に立てるという実感だ。もちろん、いつでも手を貸せるわけではない。何もしない日があっていい。それでも、できる時にできるだけ。「ちょっとやるよ」と言える隙間がある。少し足りないからこそ、人の出番が生まれる。助ける人と助けられる人を固定せず、ふらりと来た人にも、いつの間にか小さな「係」ができている。そんな、人がちょっと必要とされる下町酒場のような場があると、今の社会が少し豊かになるのではないだろうか。

誰かと笑顔を見せあえる場。

人は人と関わりあって成長します。誰かと笑顔を見せあえる場とは、自分がそこにいることを許容されている感覚、また誰かのために自らの力を発揮できている状況を象徴しています。孤独は健康を大きく損なうリスク要因とされます。一方で、私たちは他者との関わりに臆病にもなっています。SNSなどを通じて常に誰かの視線にさらされる今、人は評価されること、傷つくことに敏感になり、自らその関わりを避けてしまうことも少なくありません。「ぐんだらけ」のようなアートの取り組みが持つ力は、誰にともなく向けられたメッセージがそこにあることで、見知らぬ者同士がゆるやかにつながる契機を生み出す点にあると思います。評価も反応も強いられず、それでいて誰かの思いやりや温かみを感じられる。そうした環境こそ、今の社会に必要な「場」ではないでしょうか。傷つく恐れを負わずに人とつながれる場があってはじめて、人は自分の力を差し出す勇気を持てるのだと思います。



芳我ちより

香川大学地域看護学科教授、全国保健師教育機関協議会理事、日本公衆衛生学会代議員等。公衆衛生看護学を専門に、小児期からの生活習慣病予防、看護実践評価、経験知のモデル化等を研究テーマに取り組む。

「好き」を追い求める人が集まる場。



江本昌弘

江本手袋三代目。香川県東かがわ市引田で、1939年創業の手袋メーカーを営む。「手袋職人の聖地をつくる」を掲げ、ものづくりと地域づくりに取り組む。DJとして「瀬戸内パレアリック」も主宰。

僕は手袋職人であり、DJでもある。DJは、誰にでも受ける音楽をかけるのではなく、自分が追い求める音楽を選び、表現するものだと思っている。
ものづくりも同じで、誰かの正解に合わせるのではなく、自分たちが「これがいい」と思うものをつくる。そこには作家性が生まれ、共感する人が集まってくる。
まちも同じではないだろうか。何でも揃っていて、誰にでも好かれる場所よりも、そこに住む人が自分の「好き」を突き詰めている場所の方が面白い。
僕が引田で思い描いているのは、古民家に手袋ブランドの店が並び、本屋や音楽、アートなど、それぞれの「好き」を持った人が集まるまち。そして、世界から人が訪れる「手袋職人の聖地」である。
思い描いた未来は、発信し続ければ少しずつ形になっていく。今つくるべき「場」とは、そんな未来を思い描く人が集まり、交流し、新しい何かが生まれる場所だと思う。

場と場の間に着目しています。



新妻葉子

東京藝術大学芸術未来研究場特任助教。気になるものを、追いかけたり・拾ったり・作ったりなどの「してみる」を追求して育つ。幼少期に培った、偏った視点と知見を活かし、制作や創作を支える活動に携わっている。

人と人との関係性を苗床とし、自ずと形成されるのが「場」であるなら、「路上」を歩くのは移動する必要が生じた誰かであって、多くは見知らぬ他人である。路上では他者とすれ違う時の心許なさだけでなく、歩いてくる顔見知りに挨拶をするか悩んだり、素知らぬふりで通り過ぎてしまった時の痛みなど、むずむずした感覚が生じたりする。それはコミュニケーションの萌芽とも原初的な感覚とも言えるかもしれない。
そんな居心地の悪さを打開してくれる言葉がある。挨拶の言葉だ。すれ違う時、声帯が緊張に満ち、「こんにちは」を発話すると大概、「こんにちは」が返ってくる。挨拶は見知らぬ人とすら不自然に繋がる可能性を生む、魔法なのだ。
作品制作に携わる時にも、路上でのむずむずや発話する瞬間に似た刺激がある。作品は、対峙した瞬間に生起する、そう、路上で交わす／あるいは交わさない「挨拶」みたいなものじゃないかと思うのだ。
きっとそこに始まりがある。

つくられてない「場」、が気になる。



稲継美保

東京藝術大学芸術未来研究場特任助教。俳優として国内外の舞台で活動。並行してアートプロジェクトの企画運営も行う。同大学大学院音楽文化学専攻芸術環境創造分野を修了。

これまで「場」をつくったり「場」を運営することを自身の活動にしておいて元も子もないのですが……今興味があるのは、誰かが意図的につくったわけではないのに「場」が発生しているような状況だったりします。例えば、子どもの保育園の送りの後に、なんとなく決まった顔ぶれで毎朝駐輪場で一言二言交わす場。電車の中で席の譲り合いが伝播して、そこにいる数人に生まれる謎の連帯感。誰からともなく立ち止まり、道端で自然に始まる井戸端会議。ただ居合わせるだけよりは、ほんの少しだけ自分がその「場」に関与している感覚。そういうものが面白くて、まるで生き物のように生まれては消えていく「場」を観察しています。

とりあえず、まぁ車だそか。



馬場悠輔

東京藝術大学芸術未来研究場研究員。同大学美術学部建築学科卒業。「答え」ではなく、「答えたくなる状況」を設計する。

ありがたいことに、自分なんて名字に場が入っているもんで、わざわざ場をつくらなくても誰かが名前を呼んでくれれば、そこが場になってる！みたいな。でも、誰にも会わず、誰も名前を呼んでくれなかったとすると、まだ場ではない？から結局のところ、話せる人と会える機会が場となるんだなと感じる。
ただ意外と、この「話せる人と会える機会」を段取りするのが、最近やたらめんどくさい。よくあるのは、先にオンラインで予定を合わせてから会うけど、だいたいそんなしっかりスケジュール組んで会いたいときなんてどれくらいあるのか。やからといって知らん人に話しかけると怪しがられるわけで。
ということで、目的がなくても誰かと偶然居合わせられて話ができる状況が、自分が求めている場だと思う。個人的には、地域の人から聞いた、携帯がない昔は、とりあえず国道沿いを走り、喫茶店に停めてある知人の車で店を決めていた話は忘れがたい。

INTERVIEW

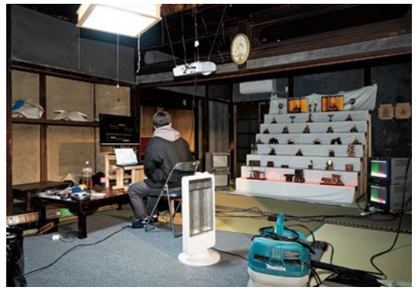
ぐんだらけという場に、学生たちは何を持ち込み、何を受け取ったのか。
引田に通う2人の学生に、その思いを聞きました。

「わけがわからない」が、わかった場所



住吉 京

香川大学創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース3年。プロダクトデザインからグラフィック、メディアデザインまで幅広く学ぶ。引田ひなまつりでは香川大学のチーム「Fictor(フィクトル)」として出展。



小さい頃から、美術は苦手で、美術館より科学館のほうが楽しいと思っていました。理学部で物理や宇宙物理をやるつもりでしたが、放送部で映像を作る楽しさが忘れられず、デザインの道を選びました。入学した当時、アートの知識はまったくありませんでした。

転機は大学2年の夏、瀬戸内国際芸術祭の会期中「ぐんだらけ」に学生スタッフとして関わったことでした。アーティストにコンセプトを聞くうちに、それまでなら「わけがわからない」で終わっていた作品が、だからこの素材で、この形なのかと腑に落ちた。美しさだけでなく、文脈を捉えることこそが現代アートなんだと実感しました。

昨年度の引田ひなまつりでは、香川大学のチームで作品を制作しました。ただ形を真似るのではなく、文化が次の世代へ引き継がれる転換点の「変化」を捉えたくて、七段飾りを模した立体構造に映像を投影しました。自分が作って見せれば終わりだったのが、観客の表情を見て、詳しくない人から深く解釈したい人まで、受け取り方に段階があると意識するようになりました。

「お帰り」と迎えられる場所で





からす

東京藝術大学美術学部先端芸術表現科4年。2024年度に国立台北芸術大学へ交換留学。マリーナ・アブラモヴィッチらの身体表現に影響を受け、演劇的手法を用いながら、生活のなかで立ち上がる「役」をテーマに制作を行う。

東京育ちで、いわゆる「地方」との縁はありません。ただ、身体を違う場所に移動させると吸収できるものが大きく、表現も流動的になる。引田では、限られた環境の中でその場所のものを食べ、咀嚼して身体に入れる。そのプリミティブな体験から生まれる言葉や身体の変化が楽しいんです。

私の制作テーマに「役」というキーワードがあります。人間が環境の中でどう役を身につけていくのか。いろんな場所へ行くのは、その場ごとに課される役割が変わるからで、その負荷が心地いい。実家やふるさとは距離を置きたい場所でしたが、引田は地域の人が自然と「お帰り」と受け入れてくれる。強い密度を持って私の中に息づいている場所です。

昨年度の引田ひなまつりに参加した際、本来は子どものために飾るはずの人形が、今は「人形があるから飾ろう」と目的が逆転し、人間が人形に操られているように感じました。その面白さから一人芝居を作りました。今回は「箱の中にしまわれている時間」に焦点を当てています。経年劣化により座るべき段を失った雛人形と交流を重ね、毎朝7時に街に流れる『浜辺の歌』の合唱を録音して、お雛様が倉庫を抜け出し、浜辺へ遊びにいく作品を制作中です。香川大学の学生と一緒に作り、展示ではパフォーマンスも交えたい。市場で買った魚をさばき、呑む。そんな手触りのある時間を過ごしながら、表現者としても美味しいタンパク質を吸収中です。

聞き手・文：編集部

EVALUATION

ぐんだらけと“評価”：実践プロセスで生成される価値を実践者とともに問う

東京藝大評価チームは、ぐんだらけの取組みに2025年度から関わっている[1]。評価なのに、なぜ活動がはじまったばかりの時期に調査を始めるのだろう、と少々いぶかしく思われた方もおられるかもしれない。社会的事業の評価は、やっていることの価値を引き出す行為であるので、まずは対象事業の狙いは何で、どこに価値を置いているのかを知らなければならない（このことを“価値前提”と呼んだりする）。そうでないと、的外れな指標を測定して、役に立たない評価情報を提供することになってしまうからだ。その意味で、2025年度はぐんだらけの評価方法を検討する貴重な期間であった。評価チームを受け入れてくださったプロジェクト・サイトにはあらためて感謝を申し上げたい。

一方で、ぐんだらけの取組は、簡単に“価値前提”を問えるようなものではないことが調査から見えてきた。引田地域の人びとのウェルビーイングの向上に挑む取組であることは前提としてあるが、そのプロセスでは、「アートとサイエンスの融合」、「ぐんだら家の拠点としてのはたらき」、「地域の多様な主体との協働」といった、実に複層的で、かつ偶発的、試行的な活動が展開されていたからである。つまり、あらかじめ仮説を立てて計画し、それに従って目標を達成するという取組みではなく、地域の文化・社会に根差しつつ、多様な主体との関係性を築きながらよい偶然や気づきを大切にして活動していくという、創発的で、プロセス重視のプロジェクトであった。

ぐんだらけはアートとサイエンスの融合という、新たな取組みへの挑戦でもある。香川大学イノベーションデザイン研究所長の筧善行さんは、アートとサイエンスの特性を「科学者は“中央値”を重視し、アーティストは“外れ値”を気にかける」[2]とし、普遍性・再現性に意味を見出すサイエンスと、偶発性・文脈性に重きをおくアートの違いを指摘した。違いを前提としたときに、「融合」とは混じり合うというよりも、出会うことでそれぞれの認識が拡張され、曖昧な境界線を引きながらも何らかの突破口を見つけ出そうとすることであろう。これは地域における多様な人たちとの出会いも同様である。たとえば、「引田ひなまつり」の活動では、20年前から始まった町一番の集客力のあるイベントに、赤をテーマカラーとした家電製品、大漁旗、手袋などを広く住民から集めてひな壇を作った。これは藝大メンバーである馬場悠輔さんの、海側と町側に分かれがちな引田を「全部ごちゃごちゃで一つの魂」にしようという発想だった[3]。また地元出身の香川大学メンバー三谷なずなさんは、異なる流れを「いったん思い切りぶつけてみること」の先にうまれる可能性を見据えていた[4]。ぐんだら家を拠点としたこれらの取組みは、まちの課題を直接解決するというよりも、多層的な関係性の創出を促すことで、地域に「変化を生み出す状態」を作り出す。そこに大きな意味があると思う。そのことの価値をどのように評価すべきなのか。

ぐんだらけの評価は、活動と成果の連続的な因果推論を実証するという従来型評価ではなく、どのような要素や条件が人々の変化をもたらしたのかといった地域の文脈にそったメカニズムを明らかにし、実践プロセスで生まれている価値を捉えることに軸足をおくべきであろう。そこでは、関係者の学び・変容の把握とともに、多様なアクターの間に立つ「ぐんだら家の拠点としてのコーディネイト機能」がどうはたらいたのかの視点が欠かせない。評価調査で得られる量的・質的根拠（データ）を踏まえながら、プロジェクト関係者自らが経験を振り返り、ぐんだら家のはたらきやそれによって生み出された価値・新たな意味を問い続ける「対話」の場も必要である。そういった評価を側面から伴走支援していく役割が評価チームにはあると考えている。

1: 現地調査は、㈱ブルー・マーブル・ジャパン（今田克司氏、大澤 望氏、端野真佐子氏）が担当した。
2: 2025年12月8日に行われた「東京藝大・香川大学関係者合同セオリー構築ワークショップ」（@香川大学イノベーションデザイン研究所）における筧 善行氏のプレゼンテーションから。
3: SIOME　2025　SUMMER、2025年7月、p6
4: SIOME　2025　SUMMER、2025年7月、p7



源 由理子

東京藝術大学芸術未来研究場客員教授、合同会社エ・バリュー共同代表、明治大学名誉教授。「評価は価値を外に引き出す行為」に魅力を感じ、関係者とともに価値を見出す参加型・創発型の評価アプローチを提唱。日本評価学会会長。



特集2

ジオアート／GEOART展

沈降と隆起
—大地を泳ぐために—

私たちは地震や気候変動、海洋環境の変化、資源問題を通して、人間の時間と地球の時間との隔たりを突きつけられています。私たちは、その隔たりを知識として理解できても、経験として知覚する方法を持っていません。

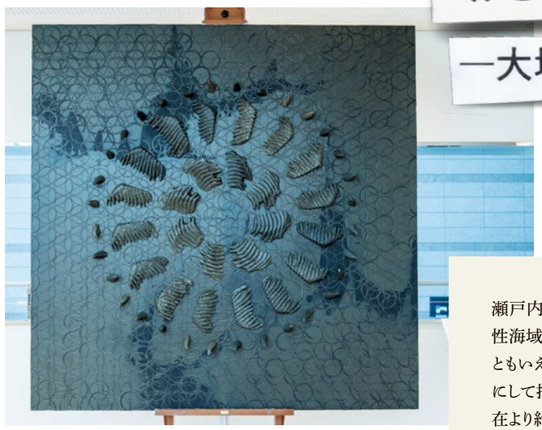
瀬戸内海は、かつての陸地が海となり、地殻変動や海面変化、人間の営みが幾層にも刻まれた場所です。香川県には、火山活動が生んだ地形が広がり、讃岐山脈の南縁を中央構造線が走っています。この海と大地を歩き、地質や歴史を調査し、採取した物質や記憶から制作が始まります。そこから生まれた作品は、異なる尺度をもつ時間の非対称性を立ち現れさせ、現在を地球的な時間のなかへ置き直します。

ジオアートは、地球の時間を身体で知覚するための芸術実践です。

（間瀬朋成）

ジオアート展は、2026年3月21日から4月12日、高松市美術館にて開催されました。作家たちはフィールドワークを重ねながら、移動と堆積の途中にある大地に触れ、そこに畳み込まれた幾層もの時間を感じとり、それぞれの表現へとつなげました。

監修：長谷川修一（香川大学特命教授、讃岐ジオパーク構想推進準備委員会委員長）、柴田悠基（香川大学創造工学部准教授）
研究協力：中國正寿（香川大学農学部、瀬戸内圏研究センター助教）



▲ title: **アビスコスモス Abyss Cosmos**

profile: **間瀬朋成**
香川大学 イノベーションデザイン研究所 特命助教

1982年東京都生まれ、美術家。東京藝術大学卒業、同大学大学院修了。人間中心主義を問い直す視点から、歴史や記憶、地質、海に内在する多層的な時間を主題に制作を行う。また、展覧会の企画や教育実践を通じて、アートと社会の関係を探求している。

瀬戸内海は、平均水深約38メートルの浅い閉鎖性海域であり、地球規模で見れば巨大な水たまりともいえる。本作は、その海底に堆積した泥を顔料にして描いた絵画である。最終氷期には海面が現在より約130メートル低く、現在の瀬戸内海の大部分は陸地であり、ナウマンゾウが生息していた。画面の図像には、その化石から取った型が用いられている。海底の泥は、大地が海へと変化した数万年規模の環境変動を記録し、生物の痕跡と地球の時間を幾層にも蓄えた物質である。本作は、この泥によって海の下に眠る不可視の時間を立ち現れさせ、小さく浅い海に内包された、地球の時間が織りなす宇宙へと鑑賞者を誘う装置である。

写真：HORI Keiko



この土地と関わる契機は、中央構造線のリサーチワークです。はじめは身体感覚の追求でしたが、採取物を展開するうち物質から空間へとアプローチが移り、いま立つ地に関心が向きました。今回は活動から立ち上がる構造体の形状に着目し、制作物を「象限儀」という道具へ役付けます。別名四分儀と呼ばれ、200年ほど前に伊能忠敬の精巧な日本地図の作製へ貢献したとされる観測機器です。徹底した実測を貫いた彼の歩測のように、どこまでも続く水平線を自分の肌で掴んでいきたい。彼の歩みから現在、そしてこれからどこへ。その問いの先に“地図のようなもの”を生み出せないか試行します。

▲ title: **《タイムスケープ：漂う》から**

profile: **田沢陽菜**
東京藝術大学 美術学部絵画科油画専攻
教育研究助手

2000年青森県生まれ。東京藝術大学大学院修了。探す行為や思考を基点に、「地続きとなること」をキーワードに活動。



今回の展示に際して実際に香川県を訪ねてみて、年月をかけて自然や人の手によってすり減り、削れていきつつあるものを多く見た。それらは確かに失われていく過程にあるが、同時に時間や人の営みが降り積もって、直接は触れられない形を形成しつつあるようにも感じられた。今回は、そんな失われながら積もるものについて、一度使ったら壊される粘土の型でつくる石膏作品を通して探った。

▶ title: **失われながら積もるもの**

profile: **伊藤奏美**
東京藝術大学 油画第５研究室在籍

2002年愛知県生まれ。自分が興味を持ったものやことについて、素材や形式にこだわらない表現を行う。現在は、時間と共に失われて見えなくなっていくものに関心を持っている。



応用地質学者 教えて長谷川先生！

ジオトリビア

？ 瀬戸内海には、島が多く海が狭まった「瀬戸」と、島が少なく広く開けた「灘」が、交互にくり返し現れます。なぜでしょう？



A 約300万年前、プレートの動きが変わり、中央構造線が動きはじめて、地面にしわができたから。

その頃、フィリピン海プレートの動く方向が変わりました。その力で日本列島に大きなゆがみが生まれ、中央構造線にそって地面が横にずれはじめました。このとき瀬戸内海の地面はタオルのようにしわになり、
・もち上がった場所 → 島が多い → 潮が速い → 瀬戸
・しずんだ場所 → 島が少ない → 潮がおだやか → 灘
という地形がくり返しできました。瀬戸ではタイやタコ、ヒラメ、灘ではアナゴやハモがとれます。瀬戸内海の豊かさには、こうした地形が関係しているんですね。

▼
title: **Y**

profile: **本田奈々**
東京藝術大学 油画第５研究室在籍
2001年岐阜県生まれ。リサーチを通して、風景に杭を打つ行為を軸に制作を行う。最近は「分水嶺」に着目し、流れの境界に現れるものを探っている。



京都府南丹市日吉町にある胡麻分水嶺に身を置いたとき、流れの起点となるはずのその場所には、特別なものは何もなく、どことも変わらない風景があった。分水嶺は、境界が固定されず、その場、その時の環境や重力によって定まり続ける。わずかな差によって水は分かれ、空から降り注いだ雨は川となり、やがて遠く離れた海へと続いていく。その循環の中に現れる、始まりであるとも言い切れない一点の状態を、かたちにした。



▲
title: **無題**

profile: **中野有華**
東京藝術大学 油画第５研究室在籍
2001年埼玉県育ち。日常の風景や滞在行為を通して、居場所と身体の関係を探る。近年はセメントや既製品を用いて制作している。

香川県の浜辺に漂着した物と、高松市内に投棄された物を、海辺で採取した砂と海水を混ぜたセメントで固め、半立体として構成した作品である。漂着物や市街地の投棄物は、海流や波、風、さらには人間の活動といった複数の力によって移動し、再配置される。それらを物質の移動の痕跡と考えた。本作は、セメントで固定することで流動していた物質を一時的に停止させ、香川における自然環境と人間の行為の痕跡が重なり合う状況を立ち現れさせる試みである。



赤い岩石から異なる色を取り出し、ガラスに定着させる試みをしていた。電気炉で溶けた色ガラスに、宇宙を旅して地球に落ちた隕石を思い浮かべた。そして、その過酷な環境にいたかもしれない微生物たちを。かつて酸素という猛毒を避け、プレートの沈降とともに地殻の奥深くへ逃げ延びた極限環境微生物たち。地上と断絶された世界で独自の進化を遂げたのではないか。それを「突然変異」と呼ぶのではないかと思う。本作は、隆起とともに地上へ噴出した地下世界の住人を描いた。金属粉は隕石や地球を形づくる素材と微生物の糧を、色ガラスは極限環境微生物や化石化したDNAの断片を表す。

▲
title: **魚の鱗の宇宙**

profile: **岡田佳祐**
東京藝術大学 油画技法・材料研究室修了
1999年生まれ。東京藝大油画技法・材料研究室修了。石や金属等の天然素材から自作した顔料で絵画を制作。近年は石本来と異なる色を抽出した色ガラスを作製し、その粒度や色に意味を持たせ、独自の表現に融合させている。

[CROSS TALK クロストーク]

ジオとアート



ジオアート展にて、西村先生が長谷川先生に自身の作品を解説する様子。

香川県全体をユネスコ世界ジオパークにしようと構想する地質学者・長谷川修一さんと、大地の時間を作品化する美術家・西村雄輔さん。「GEOART」展を機に、科学とアートが交差する対談が実現した。

長谷川修一
東京大学大学院理学系研究科修了。博士（理学）。香川大学 地域・産官学連携戦略室 特命教授。讃岐ジオパーク構想推進準備委員会委員長。応用地質学の視点から地盤災害、地域防災、ジオパークを研究。

西村雄輔
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。美術家、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻教授。場所と対話し行為する。インスタレーションも多く手掛ける。

香川県をジオパークに

編集部　せとうち讃岐ジオパーク構想について教えてください。

長谷川　瀬戸内海も含めた香川県丸ごとをユネスコ世界ジオパークにしたいという活動です。瀬戸内海、讃岐平野、讃岐山脈の成り立ちには、地球の大地の変動がよく現れています。その中には、世界的に稀なサヌカイト（安山岩の一種）という石もあります。そして、その大地と石の上に、私たちの生活と文化が旧石器時代から現在まで営まれているのです。これは世界に類がない場所だと考えています。

編集部　他のジオパークと比べて、異質な点はどこにあるのでしょう。

長谷川　一番異質なのはサヌカイトです。それから、同じ時代のマグマでできた岩や山が削られて生まれた、飯野山などの円錐形の「おむすび山」や、屋島などの山頂が平らなメサも、讃岐平野を特徴づける景観です。しかも瀬戸内海の中には「水没したおむすび山」のようなものもあります。海と陸はつながっているんですね。

編集部　海の下にも、同じ山があると。

長谷川　そうです。瀬戸内海は、地球の歴史から見ると大変新しい海です。約2万年前の氷河時代、瀬戸内海は陸地でした。それが急速な温暖化によって海面が上がって約1万年前に水没したわけです。地球規模の気候変動が景観としてよく現れているのが、私から見れば瀬戸内海なのです。

自ら形を保つ山

編集部　そのおむすび山の代表が、讃岐富士とも呼ばれる飯野山ですね。なぜ、あのような形になったのでしょうか。

長谷川　円錐形の山の典型は、富士山のような火山ですよね。山頂付近が急で、山麓に向かってだんだん緩やかになる。飯野山も形は全く同じですが、成り立ちはまった

聞き手：SHIBATA Yuki　文：編集部　写真：KAWABATA Ayaka

揺れながら
見ていることを、
含んだまま作品にしたい。



く違うんです。富士山は噴火によって火口から溶岩や火山灰が流れて、積み重なって、あの形になっています。一方、飯野山は、マグマの通り道で固まった非常に硬い岩石（サヌカイト類似の安山岩）が、円筒形の芯として中心に残っているものです。かつては上に溶岩が流れ出ていましたが、それは1400万年の間にすべて削られ、硬い安山岩が鉛筆の芯のようにとがった形で残ったのです。

編集部　山が、削られた結果としてあの形になっている。

長谷川　そうです。芯の周りには少し柔らかい岩石（風化した花崗岩）があって、雨が降ると山麓が削られて谷ができるのですが、山頂付近にある硬い安山岩が地震の時に崩れ、その土砂が山腹を覆って、谷を埋め尽くしているのです。飯野山は、真ん中に硬い芯があるから、削られても削られても、低くはなるけれど形を保てるんです。しかも1400万年間削られても、谷（シワ）のない若々しいお肌を保っているのです。



写真：HASEGAWA Shuichi

ジオにおけるアート

編集部　西村先生は、そうしたジオに対して、アートはどんな役割を果たせるとお考えですか。

西村　ジオパークにおけるアートの役割は、地質学の知識をそのまま表現に置き換えて説明することだけではないと思っています。地質学では、隆起や沈降、侵食や堆積といった現象を通して、土地がどのように形成されてきたかを長い時間の中で解き明かしていきます。一方、美術は、そうした現象が持っている時間の感覚や力の動きを、見る人が別の形式で体験する場を作れるものだと思います。

編集部　たとえば、どういうことでしょうか。

西村　堆積をひとつの地質現象として説明するだけではなく、たとえば素材を少しずつ重ねることで、時間の痕跡が作品に蓄積していくことを表現できる。侵食や風化についても、形が失われることで輪郭が曖昧になりながら、それでも何かが残り続けることを、作品の中で経験し直すことができます。

編集部　削られても残る、というのは、先ほどの飯野山のお話と重なりますね。見る側にとっては、どんな経験になるのでしょう。

西村　アートには、見慣れた土地をもう一度見直すきっかけを作る役割があると思っています。土地が非常に長い時間を抱えていること、今も変化の途中にあることに気づけるかもしれない。私自身、「変化の途中」ということにすごく気づかされました。さらに、美術は「途中」をひとつの答えにまとめない、という役割も持っていると思います。同じ場所でフィールドワークをしても、作家ごとに素材への向き合い方、観測やリサーチの仕方、時間への向き合い方が違う。そのアーティストの多様さが、ジオパークをより豊かにするのではないかと考えています。

編集部　実際にフィールドワークをされて、讃岐という土地の面白さは、どんなところに感じましたか。

西村　長谷川先生のお話を伺いながら、香川県は日本で一番狭い県なのに、その中にいろんな地質、いろんな時間が詰め込まれているような感じがして、そこに面白さを感じています。

言葉に分けられる前

編集部　『ジオアート / GEOART』展（高松市美術館）に出品した作品について、制作意図を伺えますか。

西村　タイトルは《泳ぐもの / The Ones Who Swim》です。土地を歩いて風景を見た経験から制作したインスタレーションで、香川だけでなく、東京から香川への移動の過程も含まれています。この作品では、ひとつの場所に立って風景を固定的に表現するのではなく、天から地へ、山から川へ、川から海へと、自分の視点を少しずつ移動させながら、その時の感覚を鉛板に表現しています。





西村雄輔　《泳ぐもの / The Ones Who Swim》
2026年　鉛板、映像12分　サイズ可変

編集部　立ち止まらずに、移動しながら見ている。

西村　はい。制作で意識したのは、風景を固定したひとつの像として再現しない、ということです。私たちが風景を見ているとき、立つ位置や身体の重心、光、気温、湿度、音などは絶えず変化しています。揺れを消して完成させた風景を作るのではなく、自分が揺れながら見ていることを含んだまま、作品として立ち上げたいと考えていました。

編集部　揺れを、消さない。

西村　私たちは風景を見た瞬間から、「木」「空」「大地」といった言葉で整理しているのではなく、その前に、明るいとか暗いとか、湿っているとか乾いているとか、重いとか、そういった感覚を受け取っていると思います。この作品は、そうした言葉や対象に分けられる前の感覚に近づこうとしているものです。

編集部　地質のリサーチは、作品にどう入ってくるのでしょうか。

西村　沈降や隆起などの現象を、作品として説明しようとしたわけではありません。フィールドワークを通して、大地が固定されたものではなく、今も変化の途中にあることの実感を得ました。侵食や風化からは、輪郭が失われながらも何かが残り続ける感覚を受け取り、それらを作品の中で、視点の移動、ひとつひとつの積み重ね、輪郭の曖昧さ、表面の質感などに変換しています。

長谷川　科学者は、変化する法則を見つけたい、この先どうなるのだろうと考えたくなる。でも、ドキッとしたのは、私たちは言葉やある概念を使うのに対し、西村先生は「科学の前のもの」を表したいと言われたことです。私にとってショッキングで、科学が捉える前のものがあるのだ、ということを教わりました。確かに大地や地球は、私たちが使う「言葉の前」や「科学の前」からありましたから。

地形が変わる時に

編集部　科学もまた、変化を追いかけているのですね。

長谷川　ええ。実は、地形が変わるときこそが災害なんです。私は山が崩れるのが専門で、それをいかに予測し、影響を小さくするかを研究してきました。それがアートと絡み合うと、災害の後の立ち直り、レジリエンスに何か貢献できるのではないかと、西村先生の言葉を聞きながら思いました。

西村　変化が起きた後の場所には、アーティストはすごく敏感に反応します。そういったところから何かを生み出していく。作品としてだけではなく、そうした場所を未来につなぐために、何かできることはあるのではないかと思います。

編集部　私たちは、災害の跡の土地の上に住んでいる……。土地は固定されたものだと思い込んでいますが、実は常に変化の上にいる、ということですね。

長谷川　ええ。その変化の跡地に住んでいるのです。たとえば小豆島は、土石流が何度も流れて溜まった荒れ地の上にオリーブを植えて、産業としてうまくいっているんです。災害でできた土地をいかに活用しようかと、先人たちは苦労して作ってきた。そして、また災害に遭うわけです。実際、小豆島では50年前（1976年）に大きな土砂災害があり、現在のオリーブ公園の周辺はものすごいダメージを受けました。その土地にオリーブ公園を作ることによって、災害の土地を観光地に逆転させたわけです。人間にはそういう知恵もある。単にやられるのではなく、それをさらに乗り越えようとする。そこにアートの力を借りたいなと思う時もありますね。

違いを残したまま

編集部　協働を通じて、どのような発見がありましたか。

長谷川　西村先生の「風景は固定していない」という言葉。まさにその通りで、それが今日発見できてよかったなと思います。私自

科学が捉える前の
ものがあるのだ、と
教わりました。



身も「地形が変わることが災害だ」という受け取り方をずっとしてきました。ただ、普通の人にとって大地は動かないし、景色は変わらない。土砂が流れてきたら、また元の土地に戻すわけですよ。せっかく地盤が高くなったのに、元の浸水しやすい低い土地に戻してしまう。防災教育でも、地域の弱みや「ここが危ない」ということだけではなく、「この地域にはこういう災害があって、それを克服してこういう生活を営んでいるんだよ」ということも一方で伝えないと、みんな出ていくばかりでしょう。それがジオパークのひとつの動機なんです。特に若い世代には地域の面白さやすごさを知ってもらいたいですね。

西村　この活動に関わって、「何を見たか」だけではなく「どう見るようになったか」がすごく変わりました。その変化自体を制作に含めるようになったのが、とても良かったと思っています。長谷川先生との協働の面白さは、2つの専門分野をひとつにまとめたり、同じ答えを出したりすることではないと思っています。違った言葉を、違いを残したまま対話することによって、協働の可能性、発見があるのではないか。長谷川先生の言葉には想像力をかき立てられます。この言葉の違いを受け止めながら、制作を続けていけたらいいなと思いますね。

窓



遠隔コミュニケーションシステムで ひろがる地域の可能性

香川県の島しょ部や過疎地域をはじめ全国的に抱える医療・介護、高齢化といった地域課題に対し、遠隔通信技術がその一助を担うインフラとして広まることが期待されます。さらに、そのような技術によって、遠隔演劇、アートコンテンツ、リアルとデジタルの融合などアイディア次第で今までにない新しい世界が開かれる可能性もあります。

MUSVIの「窓」は、一般的なWeb会議システムとは異なり、ソニーグループでの20年超の研究開発で培った独自技術により、臨場感やその場の空気感・気配まで伝えて、あたかもその場に一緒にいるような感覚を共有するシステムです。会話以外の非言語情報も、そぎ落とすことなく伝えます。離れたオフィス、イベント会場、教室などを繋ぐほか、PCのドキュメントを「窓」の上で相手と共有したり、別の映像入力を相手に送ったりすることもできます。

遠隔通信技術を活用して、人が集まる、人の温かさを感じる、そのような課題解決モデルを探究しています。

香川大学イノベーションデザイン研究所
特命講師
竹内達夫



MUSVI「窓」とは

等身大の大型ディスプレイで離れた場所どうしを常時接続し、あたかも同じ空間にいるかのような気配や臨場感を共有できる遠隔コミュニケーションシステムです。



写真：MITANI Nazuna

DIALOGUE

EMMA × 柴田悠基

「窓」の向こうから、赤ん坊の泣き声が届く 瀬戸内の離島と京都の劇場、二つの時間をつなぐ

EMMA　豊島にある乳児院の跡地と、京都芸術大学が持つ劇場。今回の公演は場所だけでなく時間軸も離れた二つの会場を、「窓」というシステムでリアルタイムにつなぐ挑戦でした。豊島の会場「神愛館」では現在の様子、京都の劇場では1947年の「神愛館」創設時の物語が演じられ、77年の時をはさんだ二つの空間が互いに関わり合うという構成でした。

柴田　そもそもの相談は、生成AIで戯曲を作れないかでしたよね。

EMMA　ええ。テクノロジーで新しい演劇に挑戦したい、という気持ちがあって。

柴田　当時の僕は、遠隔通信技術を用いて感性のやり取りができるのか、という課題を持っていた。コロナ禍に東京の作家とつないで展覧会を設営した経験から、これはできるという手応えがあったんです。一番高いレベルで検証できるのは演劇だろうと。それで「窓」を提案したんでしたね。

EMMA　私は普段、かなりアナログ派なんです。それでも「窓」の話をうかがったときは、この新しいシステムと遊んでみたいと思いました。島に置いた「窓」と、遠く離れた劇場に置いた「窓」を、どんな物語でつなげばいいのか。

柴田　最初は先が見えなかったね（笑）。

EMMA　瀬戸内海の島々をめぐって、豊島に決めました。戦後に建てられた乳児院があって、多くの子どもが島の自然のなか、みんなに守られて育ったと聞いて。ここを舞台にしたいと思ったんです。

柴田　島は単体で、限られた条件のなかで暮らしが回っている。未来をどう考えるかと話したとき、やっぱり子どもだよね、というところは最初に一致していましたよね。

EMMA　そこから脚本を考える、凄まじい産みの苦しみでした……。

柴田　僕は絶対にいいものができると期待していました。EMMAさんの作品は、毎回、舞台と客席が一体になるので。

EMMA　作ってみて驚いたのは、環境音がすべて双方向に伝わることでした。豊島では子どもたちがたくさん観に来てくれて、赤ちゃんの泣き声も、「わー」という声も、そのまま京都に届いていた。京都のお客さんは静かに観劇するスタイルでしたが、島の空間の温かさや、建物のなかに人がいる気配が、視覚だけではなく音として伝わっていた。あの一体感は、音の環境が大きかったと思います。

柴田　へえ。それは今日、初めて知りました。豊島側からは、逆に京都の映像がとてもクリアに見えていて。実際の窓を切り抜いて覗いたような、向こうから語りかけられているような印象が強かったんです。音の情報も含めて、空間を共有できていたということなんでしょうね。

EMMA　演劇の最後には、豊島で育ったいちごを両会場のお客さんが食べました。視覚と聴覚のやり取りに、味覚を足した。それも今回の特徴だったかもしれません。

柴田　子どものために大人が動く。それぞれが力を出し合う連帯感が、豊島にはとても強くありました。

EMMA　一人だけではできないことも、面白いことをやりたい人が寄り合うと、大きな力になる。私はそれを島で教わった気がしています。







写真：KAWABATA Ayaka

「窓」を使って上演した
『まどのむこうの子守唄』は
こちらのリンクから



EMMA

演出家。神戸市出身。各地でのリサーチを経てプロジェクト単位で作品を制作するほか、東京や静岡等の劇場で演劇の演出も手がける。本作では研究代表者および上演の構成・演出を務めた。

Photo: KANAGAWA Shingo



柴田悠基

香川大学 創造工学部 准教授、現代美術作家。「情報社会が社会に与える影響」をテーマに幅広い手法で芸術表現を行っている。趣味は釣り。新しいタイラバの世界を開拓中。

INTERVIEW

窓

竹森元彦×三垣和歌子

点の支援を、場の支援へひらく
島に関わり、窓の向こうで話を聴く



小豆島で開催した研究報告会の様子

編集部　小豆島の医療機関と香川大学医学部臨床心理学科を「窓」で結び、移住者への遠隔心理相談の実証研究に取り組んでおられます。まず、ご研究のベースから伺えますか。

竹森　カウンセリングは「個の支援」であり、必要なことです。ただ、個が抱える課題の背景にある社会や地域、制度をどう変えていくかということについても、専門家として考えていかなければなりません。離島や過疎地域には、さまざまな課題があります。そこへの支援を考えなければ、おそらく孤立が生まれる。まずは地元香川の有人島である小豆島の支援を検討することで、今後、全国で起こる縮小社会に応用できると考えています。

編集部　「窓」は同じ空間にいるような臨場感があると聞きます。

竹森　カウンセリングでは、非言語的なやり取りも重要な情報となります。例えば暗い顔をして入ってきて、話をするときにパッと明るくなる人がいる。「窓」は画面が大きく画質も良いので、対面しているように表情などの非言語情報も受け取ることができます。また、「窓」を医療機関など地域の拠点に置くことにも意味があります。従来のオンラインツールだと、どこからでも接続できる反面、誰に話を聞かれるか分からない。拠点にあれば、相談する人は、そこに行けば安心して話ができる、何かあってもバックアップしてもらえると感じられる。それはカウンセラーにとっても心強いんです。大学と医療機関をつなぎ、相談する人とカウンセラーの双方が安心して出会える環境をデザインできる。この「拠点性」が私たちの独自性です。

編集部　一人につき5回の対話を重ねる形だと伺いました。

竹森　1回だいたい1時間弱です。最初はお見合い的な感じから始まって、回数を重ねると、その人がどういうふうに生きてきたか、これからどう生きようか、という話になってくる。内省がすごく深まっていく。私もびっくりしたのですけど、会ったことがない小豆島の相談者と、最後には互いに「会ったような」気持ちになったんですね。これからも、この5回を自分の中の体験として、大切に生きていかれるんじゃないかなと思いますね。

編集部　三垣さんは、令和7年度から始まった移住者調査を担当されています。令和8年2月には報告会も開かれました。

三垣　小豆島は移住者同士のコミュニティがあり、また住民の皆様も温かく、調査への協力をお願いしたところ、紹介で一気にご協力の輪が広がりました。10人程度の聞き取りを想定していたのですが、最終的には25人の方からお話を伺うことができました。移住者に対しては、行政や地元の団体から様々なサポートが提供されていますが、移住後に直面する具体的な困りごとの内容や生活の実態、移住者の心理面の実態などをより詳細に知りたいというお話をお聞きしました。だからこそ、心理学の専門性を活かした調査を行うことで地域の力になれると考えました。報告会では、住民やまちの専門家から非常に重要なご指摘をいただきました。まちの専門家によると、移住者の中にも「自ら行政にサポートを求めに来られる人」と「困っていてもSOSを出せずに孤立してしまう人」がいるそうです。そして後者の「来られない人」には、調査も「窓」による支援も届いていません。この層までどう包括してサポートしていくか。私たちが次に挑むべき真の課題が見えてきました。

編集部　藝大との連携という点では、この先どんな展開を考えておられますか。

竹森　違う場所にいる相手の感情をより理解する手法のひとつとして、「描画」もいいのではと考えています。絵は視覚情報ですが、絵に感情や情緒が入ります。つまり、アートですね。「窓+アート+カウンセリング」の可能性があるんじゃないかと。藝大の先生たちと話しながら、発展形として、いい研究につなげていけるなと思っています。ただ「窓」を「点の支援」として活用するのではなく、「拠点型の支援」と合わせていけるといいな、と思います。地域の中で居場所を作って、そこに人が来て地域と交流する。それがこれからの心理的支援としても重要なんじゃないかなと思っています。



竹森元彦

香川大学医学部臨床心理学科教授。専門は臨床心理学。現場に足を運び地域と対話を重ねながら、遠隔カウンセリングによる移住者支援を実践。日本文化特有の「ウチ」と「ソト」を結ぶ心理支援の研究に挑む。



三垣和歌子

香川大学医学部臨床心理学科特命助教。専門は臨床心理学、宇宙心理学。宇宙空間等の極限環境におけるクルーの対人関係や、離島への移住者のメンタルヘルスについて研究。

聞き手・文：編集部　写真：KAWABATA Ayaka、MITANI Nazuna

SIOME Topics

［シオメ］トピックス
AUTUMN 2026

Topic：1　アートを介して大島の未来を考える、子どもたち主体の実践成果展を開催

香川大学教育学部附属高松小学校のプロジェクト型学習で、瀬戸内海の離島・大島をテーマに現代アート実践を行いました。大島に残る記憶を次世代へつなぐことを目指し、子どもたちは山川冬樹氏をはじめとするアーティストとの交流を通して、アートを介して社会と関わる方法を学びました。そして、大島の歴史や暮らしから着想した「誰でもできるゲートボール」を自ら考え、実践。その成果を高松市美術館で「わたしたち赤2組は考える」展として発表しました。





写真：HORI Keiko

Topic：2　島と島を繋いでゆく——離島連携による地域課題の相互解決

隣り合う豊島・男木島・小豆島では、それぞれ異なる地域課題に対し、子育て世代の移住者を中心に様々な活動が始まっています。香川大学と東京藝術大学は、豊島でアート・福祉・多世代交流の拠点づくり、男木島で子どもの遊び場整備と空き家再生、小豆島で遍路道整備を通じた地域の担い手の連携を支援しています。さらに、各島で活動する主体者同士をつなぎ、3島を行き来しながら活動や課題を共有することで、それぞれに不足する取り組みや知見を相互に補完し、各島の地域性を更新しながら継承するとともに、活動の発展と地域全体のレジリエンス向上を目指しています。





SIOMEとは？

SIOMEは、東京藝術大学と香川大学が連携し、アートとサイエンスを基軸に、異なる流れの交差（潮目）で課題解決を「ともに考え、ともに実践する」取組の総称です。文部科学省・日本学術振興会「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」の採択を受け実施しています。瀬戸内には豊かな自然と文化がある一方、環境変化や人口減少等の課題もあります。科学の分析力とアートの創造力を合わせ、環境保全や島の暮らし等を新しい角度から捉え直し、地域の人々や企業・自治体との共同実践を重ね、地域の知恵と大学の専門性を繋ぐ持続可能なモデルを探究します。瀬戸内の自然と文化を未来へ繋ぐためアートとサイエンスの融合から新たな価値を生み出すことを目指しています。

SIOME
東京藝術大学×香川大学
ART & SCIENCE

PROJECTS OF SIOME

① 海洋環境
瀬戸内海の生物多様性、ブルーカーボン、海洋ごみなどの課題を科学調査とアートの視点から探究し、環境保全と新しい海の活用モデルを創出します。

② 離島環境・過疎地
島の暮らし、医療、モビリティ、DX、観光など離島特有の課題に向け、地域と協働しながら実証と研究を行い、持続可能な瀬戸内海の未来像を描きます。

③ 人材育成
アートとサイエンスを横断する学びの場をつくり、子どもから若者、企業人まで、多分野協働で地域づくりに貢献できる人材を育成します。

編集後記

私たちが活動する瀬戸内海の地域には、海や土地が育んだ、人々のゆたかな営みが折り重なっています。今日の海の表情を見て、漁の様子をうかがう。山の紅葉に季節の変わり目を知る。鳥が天気を教えてくれる。災いが降りかからないように祈る。そんな日々のなかで、「ここで生きている」ことや、この暮らしを自分たちの手で営んでいると実感できることこそ、今までもこれからも変わらないゆたかさなのかもしれません。

遠く離れた場所の出来事を瞬時に知ることのできる時代。それはときに、いま、ここで起きていることを見えにくくします。だからこそ、足元にある小さな変化や、土地に刻まれた記憶、人々の営みに目を凝らしたい。アートと科学という異なるまなざしを携えて、ここに生きる人々とともに考え、手を動かす。SIOMEが、そんな「いま、ここ」にもう一度目を向けるきっかけになれば嬉しいです。

SIOME 02 編集長　みたになずな（香川大学 イノベーションデザイン研究所 特命助教）

J-PEAKS
東京藝術大学　香川大学
芸術未来研究場

公式Webサイト
setouchi.ac

SIOME Autumn 2026　［2026年11月10日発行］

監修：日比野克彦（東京藝術大学）、橋本和幸（東京藝術大学）、筧 善行（香川大学）
編集長：みたになずな（香川大学）
編集：柴田悠基（香川大学）、井上裕史（東京藝術大学）、林 裕樹（香川大学）、三木麻紗子（東京藝術大学）、井上英樹（MONKEYWORKS）
アートディレクター：樋笠彰子（海と例）、守屋史世（ea）

発行：東京藝術大学、香川大学　印刷：藤原印刷
お問い合わせ：SIOME編集部（Web：https://setouchi.ac）

本冊子の一部または全部を無断で複製・転載・翻案することを禁じます。
All rights reserved. Unauthorized reproduction, distribution, or adaptation of any part of this publication is prohibited.

